

分科会の記録 <第1B分科会 教育課程に関する課題>

【提言者1】 福井県 敦賀市立角鹿小中学校 小島 義和
【提言主題】 未来を担う力を育む保幼小・小中接続のあり方 — 0歳から15歳までの「学びのつながり」づくり —
【協議の柱】 業務改善と新しい生活様式に適した「保幼小・小中接続」実践のための副校長・教頭の役割について
【グループ協議 報告】 ① コロナ禍でも進められること 教頭間で情報交換を行い、情報共有していくことが重要。 教頭会で作成した枠組みを各学校におろしていく体制が参考になった。 ② 幼保小中の連携 今までも幼小、小中と情報交換をして学級編成等に活かしているが、情報交換だけにとどまらず、情報を共有し連携していくことが必要。 小中の公開授業で、視点を明確にして取り組んでいる点が参考になった。 小中の文化の違いがあるが、交流をしてお互い理解しあうことが大切。 ③ キャリア教育 15歳の中学校卒業後の「めざす生徒像」を見据え、中学3年生の弱点をクローズアップして小1～中3の学びのつながりを重視した取り組みが参考になった。
【指導助言：全公教顧問会】（山形県山形市立山寺小中学校長 高木 光紀 氏） ① 接続の目的と効果：「つながり」や「連携」という接続は、何をどのようにつなぐのかということ、つまり目的とその効果の分析が重要。今回の発表では、敦賀市が施設一体型小中一貫校としてパイロット校を設置したこと、市内全体で保幼小と小小・小中の連携を統一して進めてきたことが大きな提案だった。注目した施策と取組は、支援員の配置と年間計画の明確化だった。 ② 教育と発達段階：点と点のつながりで線としての結びつきが強くなる。どこをどのように強くするか、敦賀市は小中のつながりを重視して、とても強くしていることがわかった。中高の接続も今後の大きな課題である。 ③ 教員・教頭の役割 最近話題になっていることの一つに、小学校の教科担任制がある。小中の接続を重視した取組に小6の授業体験が進められている。飛び込みの単発授業は、担当する教員の力量が重要。教師の力量や研修意欲が必要になってくる。 「継続性」「協働性」「関与性」の視点がしっかり位置づいた取組であった。今後教師の働き方改革に照らし合わせながら、連携に必要な取組を洗い出すことも大切なのではないかと感じている。
【指導助言：佐賀県】（佐賀県学校教育課指導主幹 藤田 浩巳 氏） 幼保小接続事業として「スタートカリキュラム」を作成されたこと、それを各段階で指導に当たる保育士や幼稚園教諭・教諭が次の段階の子どもたちのあるべき姿を共有し、実践されたことは価値ある提言であった。きちんと計画をされ、それを見える化・体系化・組織化されたことで、スムーズな接続ができていた。幼稚園と小学校では、子どもの発達や学び方に違いがある。小学校では、幼児期に育まれている力について知ることが大切である。学校見学会については、各学校単独で行うより、市全体で行う方が効果的である。 幼保小連携、小中連携の成果がたくさんあげられている。課題として「合同研修会の時間の確保」「連携の構築」「学校・園全体の取り組みとなることが重要」と発表いただいた。課題を焦点化し、持続可能な取り組みにしていかなければならない。そのためには業務を分担していくことが重要である。